

第11回 下京繁華街の旧跡

八坂神社御旅所と冠者殿社

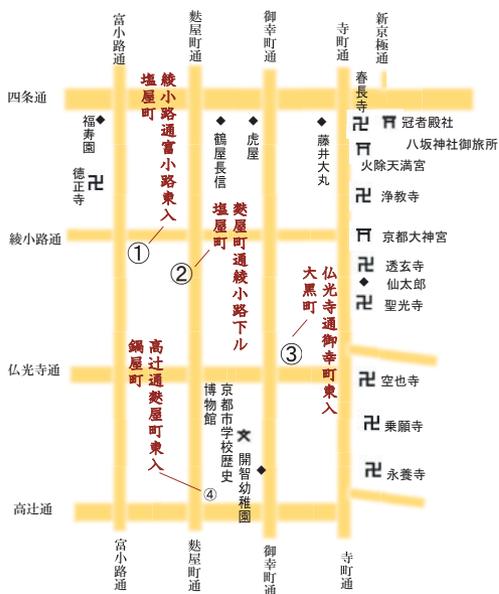
第10回の東側の地域は、下京区の繁華街です。この近辺をさがしますと、町名看板「綾小路通富小路東入塩屋町」①があります。今回は、ここから出発です。



綾小路通富小路 東入 塩屋町 ①

この看板のある富小路綾小路の十字路から、すこし北に、徳正寺（富小路通四条下ル徳正寺町）があります。『改訂京都民俗志』〔井上頼寿、ワイド版東洋文庫二二九、平凡社、一九六八〕によれば、徳正寺の庭に、「富小路細川の井戸」があるそうです。この井戸は、『拾遺都名所図会』の「徳正寺」の項目の中に、「勝久井」として紹介されています。今回は、見落としてしまいました。が、のちの機会に訪れることにしましょう。

「お茶には水」といいますが、名水のあるところ、お茶の老舗



仁丹町名看板の所在（駄屋町通の四条から高辻まで）

四条富小路の西南かどには、福寿園の京都店。PETボトルの伊右衛門で有名になりましたが、寛政二年（一七九〇年）創業の宇治茶の老舗です。

さらに、「お茶には和菓子」と申します。四条富小路の交差点から、四条通南側の雑踏の中を東へ歩いて和菓子屋を探しますと、おあつらえ向きに、四条通駄屋町東入ル奈良物町には、創業元禄六年（一六九三年）の鶴屋長信。名物は利休餅。同じ並びの四条通御幸町西入ル奈良物町には、創業が室町時代末期という虎屋の四条店。各種の羊羹のほか、干菓子など。

四条通御幸町の東は藤井大丸。そして、寺町通との交差点。新
 京極のアーケードを延長したところに、八坂神社御旅所の西殿。
 少し東に東殿。祇園祭の神幸祭のとき、御旅所に着いた神輿三基
 は西殿と東殿の間の建屋（普段は土産物屋）に鎮座します。



八坂神社御旅所西殿と冠者殿社

御旅所西殿の西脇に、「冠者殿社」(官者殿社とも表記)。祭神は
 素戔嗚尊の荒魂。社殿横の壁に貼つてある由緒書によれば、「も
 とは烏丸高辻にあつた八坂神社大政所御旅所に鎮座していたが、
 天正十九年に豊臣秀吉の命により、御旅所が現在地に移転した
 時、樋口(万寿寺通)高倉の地(現在の官社殿町)に移され、さ
 らに慶長のはじめに現在地に移された。明治四十五年、四条通
 幅に伴い旧社地より南方に後退している。毎年十月二十日の祭を
 俗に「誓文払い」という。」と説明されています。

神に誓う起請文のことを誓文といいますが、「誓文払い」とは、



『拾遺都名所図会』巻之一 官者殿社の誓文払いの図
 (国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」よ
 り引用)

これを払って(被つて、要するに反故にして)、神の罰を逃れよ
 うとすること。冠者殿社は、誓文を反故にしてくれる神様とい
 わけです。『都名所図会』には、冠者殿の「誓文払い」の挿絵が
 載っていますので、引用しましょう。挿絵の中に説明文には、次
 のように記されています。

十月廿日に誓文はらいとて四条京極の官者殿に詣で
 群集し祇園鴨川の浮女もここに来てちかひをはらひ又其
 夜より誓文を立るも此神は見ゆるし給ふかや

嵯峨山や都は酒のゑびす講 其角

商売人は言うに及ばず、祇園・鴨川の遊女にとつては、実にありがたい神様です。それにしても、この挿絵の中に描かれた人物は意味ありげです。禿をつれた遊女とおぼしき、被りものをした女は、まあ了解できるにしても、あとの二組はなにを示そうとしたのでしょうか。山岡頭巾の男、頭巾の子供を背負った小僧と旦那、どちらもよくわかりません。心なしか、山岡頭巾の男の視線は、被りものをした女に向いているようにも見えます。これがその通りだと、意味深長ですが、どうなんでしょうか。

「誓文払い」は、『平家物語』の有名な「堀川夜討」によつて、土佐坊昌俊に結びつきました。その顛末をついでですから、ご紹介いたしましょう。鎌倉から源義経を討ちにくた土佐坊昌俊は、義経方に悟られないように少数の手勢で京へ。義経の堀川館に来るようにいわれて、しぶしぶ参ります。このとき、当然のことながら、討手としてきたのではないかと、詰問されます。昌俊は、討手ではないと嘘の起請文を書いて、その場をしのぎます。

昌俊は、その夜に堀川館に夜討をかけますが、逆に敗れて、首をはねられます。史実はどうかというと、『吾妻鏡』第五『全訳吾妻鏡』第一巻、貴志間正造訳註、新人物往来社、一九七六、文治元年（一一八五年）十月十七日の条に、次の記述があります。

丙寅、土左房昌俊、先日關東の嚴命を含むによつて、水尾谷十郎已下六十騎の軍士を相具して、伊豫大夫判官義経の六條室町の亭を襲ふ。時に豫州方の壯士等、西河の邊に逍遙するの間、残り留まるところの家人幾ばくなく

らずといへども、佐藤四郎兵衛尉忠信等を相具して、みづから門戸を開き、懸け出でて責め戦ふ。行家この事を傳へ聞き、後面より來り加はりて、相共に防ぎ戦ふ。よつて小時あつて昌俊退散す。豫州の家人等走り散じてこれを求む。豫州すなわち仙洞に馳せ參じ、無爲の由を奏すと云々。

翌日、後白河法皇から源行家と義経に、源頼朝追討の院宣が下されます（『吾妻鏡』は、後白河法皇に配慮して、この箇所では微妙な書き方をしています）。十月廿六日に、昌俊が捕らえられて六条河原で梟首された旨の記述があります。

この顛末が脚色されて、能『正尊』（能では昌俊は、正尊）になります。この起請文を読み上げるところが面白いので引用してみましよう。

敬つて白す起請文の事。上八梵天帝釋、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、泰山府君、下界の地に八、伊勢天照大神を始め奉り、伊豆箱根富士浅間、熊野三所、金峰山、玉城の鎮守、稻荷祇園賀茂貴船、八幡三所、松の尾平野。総じて日本国の大小乃神祇、冥道、請じ驚かし奉る。殊に八氏の神、全く正尊討手に罷り上る事なし。この事偽りこれあらば、この誓言の御罰を當たり來世八阿鼻に墮罪せられんものなり。仍て起請文かくの如し。（後略）

この読み物が能『正尊』の山場、立て板に水と、よくもこれだけの神様を読みあげたものです。『平家物語』からはなれますが、

起請文を破つたために殺されたことから、「死ぬ間際に、昌俊は、忠義のために起請を破つたものを救う誓いをたてた」という俗説がうまれました。この俗説と、冠者殿社の「誓文払い」が結びついて、「冠者殿社の祭神が土佐坊昌俊である」といわれるようになったというわけです。

誓文払いは、同じ日におこなわれることから、「えびす講」ともいいます。転じて、商売上の約束をたがえたり、取引上で掛け値を吹っかけたりしたことを許してもらおう意味になりました。その感謝の意味でおこなった、蔵ざらえの大売出し（バーゲンセール）のことも誓文払いというようになりました。つまり、掛け値をした値札が誓文で、その誓文を破棄して、罪滅ぼしに適正価格の正札より安くすること。三井越後屋の「掛け値なし、現金正札」の商売が井原西鶴の『日本永代蔵』で喧伝されるくらいですから、普段は、盛大に掛け値をしていたでしょう。今では繁華街の中で目立たない冠者殿社が、バーゲンセールのルートとは思ってもよらぬことです。

寺町の寺々と電気街

町名看板⑥のところに戻って、綾小路通を東へ歩き、麩屋町綾小路の十字路から南下したところに、町名看板「麩屋町通綾小路下ル塩屋町」②があります。この看板の町名「塩屋町」は、看板①と同じ。

綾小路通をさらに東へ進みますと、寺町通に突き当たります。突き当たったところに、**京都大神宮**（寺町通四条下ル貞安前之



麩屋町通綾小路 下ル 塩屋町 ②

町）があります。創建は比較的新しく、明治六年（一八七二年）に、伊勢神宮より、内宮外宮を勧請 京都府神道青年会のお社 web (<http://kyoot-yashiro.jp/shuin/>) のリストによれば、祭神は、天照大神 豊受大神 社殿は、元的一条家の書院を移築したもので、当初は神風講社として発展。太平洋戦争後、京都大神宮と改称。

寺町通に突き当たったところで、あらためて、寺町通を歩いてみましょう。四条通の交差点から南の寺町通は、電気街として有名です。駐車場が広く取れないために、郊外の電気店に客を奪われて、かつての賑わいはありませんが、いくつかの店は健闘しています。それらの店のうしろに隠れるように、寺町の名前の由来となった寺々が健在です。

四条寺町の交差点から少し南下した東側、まず、浄土宗の**春長寺**（寺町通四条下ル貞安前之町）。もともと、村井貞勝（織田信長の家臣。天正元年（一五七三年）より京都所司代）の屋敷（三条京極）の中にあつたが、貞勝が織田信忠（信長の嫡男）に従って本能寺の変で戦死したので、その霊を弔うため天正十一年（一五八三年）にこの地に移したとされています（『京都市の地名』。寺



京都大神宮

名は、貞勝の号、春長軒にちなんでいます。天明の大火（一七八八年）で焼失。その十年あまりあとに、再建して現在に至っています。信長麾下の能吏、村井貞勝という人物も調べてみると面白そうです。結局はうまくゆかなかったのですが、本能寺の変で信長の最後を見切つて、その嫡男信忠のもとに馳せ参じ、織田の家を守るうとした決断は見事。寄り道をするとう長くなりそうなので、のちの機会に譲ることにします。

その南のビルディング脇の細い参道を抜けたところが、**火除天満宮**（寺町通四条下ル貞安前之町）。もと大雲院の鎮守社で、慶長二年（一五九七年）に大雲院とともにこの地に移動

このあたり町名「貞安前之町」は、大雲院の祖貞安上人にちなむものです。『都名所図会』巻之二には、「龍池山大雲院」の項があり、挿絵が添えられています。挿絵の左下隅、京極通（今の寺町通）に面した門の北脇に建物があり、「ちんじゆ」という札が描かれています。多分、これが火除天満宮の前身であろうかと推定されます。どんどん焼のときに、この一帯が焼失をまぬかれたことから、学問の神のほかに火除けの神としてもあがめられるようになりました。明治初めの神仏分離のときに独立。天満宮二五社第九番。大雲院は、昭和四八年（一九七三年）に円山公園に南に移転。跡地は高島屋の駐車場になっています。

さらに南には、**浄教寺**（寺町通四条下ル貞安前之町）。『拾遺都名所図会』巻一には、「浄教寺燈爐堂」の項があり、

京極通綾小路北にあり。浄土宗。知恩院に属す。四十八願巡の第四十三番なり。當寺初は小松内府重盛公の建立にして、洛東にあり。これを燈爐堂と號す。事は源平盛衰記に見えたり。後世洛中東洞院高辻に移し、天正年中又此地に移す。鎮守は熊野三所権現なり。中興は立誓上人。

『源平盛衰記』巻第十一では、「燈爐大臣の事」の題で、「平重盛が東山の小松谷に、四体の十二光仏（都合、四八体の阿弥陀仏となる）を安置して、四八個の燈籠を掲げて「燈籠堂」（燈爐堂）と称した」と述べています。この燈籠堂のちに浄教寺となりました。東洞院高辻から東洞院松原までの両側町として、「燈籠町」（第7回「祇園祭・保昌山」参照）が、その東側には第7回の看

板「高倉通松原下ル本燈籠町」に出てきた「本燈籠町」が名残として残っています。

続いて、上述の京都大神宮があって、さらに南に透玄寺（浄土宗、寺町通綾小路下ル中之町、重要文化財如意輪観音座像（鎌倉時代一二五六年頃）、京都国立博物館に寄託）、聖光寺（浄土宗、四八願巡りの第四二番、寺町通仏光寺上ル中之町）、空也寺（浄土宗、四八願巡りの第四一番、寺町通仏光寺下ル恵美須之町）、乘願寺（浄土宗、四八願巡りの第四十番、寺町通仏光寺下ル恵美須之町）、永養寺（浄土宗、寺町通高辻上ル恵美須之町、第8回「天明の大火」参照）が並んでいます。「四八願」とは、浄土宗の根本聖典とされる無量寿経の中で、阿弥陀仏が法蔵菩薩として修行するにあたって立てた四八項目の願のことです。「四八願巡り」は、『拾遺都名所図会』巻一に記載されているものですが、詳細はよくわかりません。

以前は、空也寺の北に浄土宗法然寺（熊谷直実こと蓮生房が法然を開基として開いた寺、法然上人旧跡巡り二五箇霊場の第十九番）がありました。昭和三九年（一九六四年）に右京区嵯峨天竜寺立石町に移転したそうです。『拾遺都名所図会』巻一には、「正安年中（一二九九～一三〇二）に後伏見天皇（在位一二九八～一三〇一）の病氣の際に法然上人が夢枕にあらわれ、平癒したのちに調べると法然寺の法然上人像（円光大師像）とそっくりであったことから、後伏見天皇の「極楽殿」の勅額を賜った」とあります。一方、「極楽殿」の勅額は、正安年中に後深草天皇（在位一二四六～一二五九）から賜ったもの」という記載が『山州名跡誌』（正徳元年、一七一一年刊）にあるそうです（『京都市の地

名』の「法然寺跡」の項）が、これは年代の点でありません。この勅額の実物が移転した法然寺に現存しています。

これらの寺々は、いずれも、豊臣秀吉の京都改造の際に、この地に移されたもので、天明の大火（一七八八年）のときに、被災しましたが再建しています。この地域は、どんどん焼のときは、焼けずに残りました。

ここで、和菓子屋。聖光寺の門の北側に、「仙太郎」（寺町通仏光寺上ル中之町）。餡がごぼれんばかりの名物「ご存知最中」。メタポリックシンドロームが心配のかたへ、およそ九十グラムで、二二キロカロリーだそうです。ちなみに、清酒一合は、一九〇キロカロリー前後。ビール大瓶は、二五〇キロカロリー前後。

京都市学校歴史博物館

空也寺の前から仏光寺通を西にゆくと、町名看板「仏光寺通御幸町東入大黒町」③があります。



仏光寺通御幸町 東入大黒町 ③

この十字路から、御幸町通を南下すると、京都市学校歴史博物館（御幸町通仏光寺下ル橋町）があります。ここは、元の開智小

学校。写真に写っている校門は、高麗門様式で明治三四年建築。石塀は、白川石を使った間知塀。どちらも、京都市有形文化財（平成十七年より国の登録有形文化財）。なお、間知塀とは、間知石（前後に大小二つの面をもった截頭四角錐状の石材）を用いて積んだ塀のこと。「この石積みがどんなものか」は、門の両側をみれば、一目瞭然です。

最近になって、元の成徳小学校の講堂（明治八年建設）が、明治四二年に城陽市高田の高岳寺の本堂として活用されていたことがわかり、その玄関を、平成十九年に京都市学校歴史博物館の玄関として移設しています。この玄関の柱は先の細くなったローマ風、屋根はアーチになった「擬洋風建築」様式の遺構として貴重（平成十九年に国の登録有形文化財として答申）。鉄筋コンクリートの校舎に、木造の玄関は、まだじっくりしません、そのうちに風格がでてくるでしょう。

京都市学校歴史博物館には、教科書コレクションが常設展示されています。『商売往来』などの江戸時代の寺子屋の教科書（往来物）、明治時代以降の教科書が展示されています。京都市の学校・幼稚園に卒業生などからの寄贈された品で、歴史的、芸術的に価値の高いものをあつめた「学校文化財」と称する展示も特色があります。

京都市学校歴史博物館の南隣は、開智幼稚園。「開智」の名前は、幼稚園に残されています。開智幼稚園の所在地は、公式には鉄屋町通仏光寺下ル鍋屋町。入口は、御幸町通に面しているのでややこしい。仮に入口の近辺に町名看板を貼るとしたら、「御幸町通仏光寺下ル鍋屋町」あるいは「御幸町通高辻上ル鍋屋町」と



京都市学校歴史博物館（元の開智小学校）

なるはず。公式の所在地については、「鍋屋町は、鉄屋町通の両側町である」という伝統が無意識にはたらいたたためだろうと推測しています。ちなみに、京都市学校歴史博物館の門のあるところはその所在地と同じ橋町ですが、建物のあるところは、鍋屋町になっっているみたいです。ますます、ややこしいですね。高辻鉄屋町の十字路の東北かど、自動車整備工場の二階に「高辻通鉄屋町東入ル鍋屋町」④が見つかりました。



高辻通 数屋町 東入 銅屋町
④



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（<http://xyntex.com>）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第11回）2008/03/21
© 2007, 2008 藤田眞作 <http://xyntex.com>